

第3回

日野市立学校適正規模、適正配置等検討委員会会議録

令和3年（2021年）9月21日

日野市立学校適正規模、適正配置等検討委員会

第3回日野市立学校適正規模、適正配置等検討委員会

- 開催日時 令和3年(2021年)9月21日(火)
18時30分～21時00分
- 開催場所 日野市役所5階 506会議室
- 出席委員 梅澤秋久会長、石田恒久委員、安田尚民委員、大神田信教委員、小宮広子委員、岩下優美子委員、坂田雅江委員、野田ますみ委員、麻野綾委員、田中裕之委員
- 欠席委員 箕輪潤子副会長
- 事務局出席者 村田教育部長、谷川教育部参事、久保田学校課長、森谷学校課学務係長、清水学校課主任、西山学校課主任
- 傍聴者 なし

議事内容

【会長】

皆様こんばんは。定刻となりましたので、ただ今より第3回日野市立学校適正規模、適正配置等検討委員会をはじめさせていただきます。本日の検討委員会は、前回に引き続き会長の梅澤が進行の任を努めてまいります。委員各位におかれましては、円滑な会の進行にご協力いただきますよう、よろしく願いいたします。事務局、今日傍聴のほうはいかがでしょう。

【事務局】

傍聴はございません。

【会長】

わかりました。では、検討委員会の開始にあたり、事務局より説明があればお願いいたします。

【事務局】

今回は、出席委員から追加の資料が一部ありましたけども、事務局からの検討に関する資料はございません。前回、いくつかご質疑いただいた点について、冒頭で補足させていただきましたと思います。前回、第2回の検討委員会で、質問の問いとしては「公立幼稚園近隣の

児童数」、「空き教室について」、「事業別コスト計算書の年度間の増減」がございました。この点につきまして、メールにてご返答いたしました。補足をさせていただきます。

まず始めに、配布いたしました資料、「令和3年度児童・生徒・学級数」をご覧ください。

こちらについては、市立幼稚園、その他の学校における、それぞれの近隣小学校の児童数などにつきまして、表の右側「小計欄」にごございます数値をご確認いただきたいと思います。第四幼稚園の隣となります日野第四小学校の児童数が685名、学級数は20クラス。また、第二幼稚園の隣となります平山小学校の児童数は545名、学級数は19クラスとなります。いずれも5月1日時点における人数です。

次に「空き教室」の状況です。前回の検討委員会で配布の資料2「日野市の人口推移」でお示ししましたとおり、日野市の人口は現3歳児から大きく減少傾向にあることをお伝えしました。このような過程の中で、普通教室については、現在、通常学級や特別支援学級、特別支援教室（ステップ教室）のほか、空き教室の範囲の中で算数少人数や英語教室、リソースルーム、ひのっちなど校内で必要とされる用途で使用されている状況です。したがって、いわゆる「空き教室」については、どの学校においても現状ありませんが、改修工事等を行い、普通教室への転用、今回のテーマでいうと、幼稚園を学校の中に入れるという視点からご質問をいただきましたので、保育室への転用ということは技術的に可能となります。ただし、この場合においても、本年4月より始まりました「1学級35人」制度の開始により、仮に児童数は横ばいでも、学級数は増となるケースが今後見込まれる学校がございます。公立幼稚園の立地する日野第四小学校、平山小学校においては、地区内人口の一時的な増加や横ばいが続くため、学級数は現状から1から2クラス程度増える見込みもあり、普通教室の転用自体も難しい状況となっています。

続きまして、「事業別コスト計算書」こちらの増減についてご質問いただきました。前回配布の資料2「コスト計算書」の中で、平成29年度を境に増減が見受けられたとのご指摘でしたけども、メールで回答したとおり、一番低い金額になっているときには、第三幼稚園が閉園になりましたので、運用コストについても、相当分が減少したということでごございます。内容につきましては、産休・育休代替等教諭雇上、特別支援教育支援員雇上にかかる人件費が主な内容となっています。また一時的に、令和元年度が増加に転じていますが、こちらは施設整備の関係で、冷暖房機を設置したために、一時的な増に転じているものです。説明は割愛させていただきますが、もう一枚エールの活動報告書に抜粋しました、エールのサービス利用状況について一覧をまとめさせていただきました。前回手元に資料がなく、お答えした人数につき、幅のある回答となったため、あらためて配布するものです。事務局からは以上です。

【会長】

前回の質問に対する回答ということでご発言いただきましたが、今の回答に対して何か質問はございますか。

質問なし

【会長】

よろしいでしょうか。これまでの2回を振り返りますと、第1回は主に幼児教育の在り方、市立幼稚園の今後など「質」の視点についてご発言いただきました。また第2回は、幼児人口の減少や在園児数など「量」の視点に立ち、事務局からの説明を受けたという経緯がございます。

本日の第3回は、この検討委員会へ諮問された事項「市立幼稚園の適正配置」について、いよいよ答申を意識しながら総括的に検討していきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

異議なし

では、はじめに30分程度をいわゆる「質」の部分、幼児教育全般に関する、在り方ですとか理念とか、そういう所を検討させていただき、次に「量」の部分、数とか、そういったものを踏まえて検討し、後半残りの時間で総括的な議論ができたらいいかなと考えています。質と量にかかるテーマについてはそれぞれ、検討委員会としての「方向性」を示していきたいと思いますが、いかがでしょうか？

異議なし

では、いよいよ在り方、質について検討したいと思いますが、本日資料をお持ちいただいた委員よりお話をお願いします。

【委員】

私は日野市の幼保小連携教育推進委員会を担当しております。小学校は私と仲田小学校のa校長、公立幼稚園では第二幼稚園のb園長、公立保育園ではしんさかした保育園のc園長、ひらやま保育園のd園長が参加し、担当の指導主事としてe指導主事が関わってくれています。これは市内全ての小学校、公立保育園、私立保育園、私立幼稚園をABCDの4つのブロックに分けて研究会を行っております。

大きな目的は、今までは幼稚園保育園側から小学校と連携したいとオファーを受けながら小学校が対応する形の委員会だったのですが、10年くらい前では、幼稚園、保育園、公立、私立から来る子供達は1年生になるとみんな一緒になり小学校は混乱するので、どうしようかという「スクラップ&ビルド」で、一度壊して、小学校の教育を1年生から、入学式からスタートするという意識が強かったので、適応指導というものを中心に行ってい

ました。そうすると、せっかく幼稚園保育園で育ててもらった力が、1年生になった途端赤ちゃん扱いされて力を発揮できず、色々言われてしまうので、適応障害（小1プロブレム）を起こしてしまうぞといわれた中で、保育園の保育指針や幼稚園の指導要領が変わったり、小学校でもスタートカリキュラムを取り入れたり、幼稚園保育園で学んだことは、ゼロからのスタートじゃないという意識に変えてスタートするようになりました。幼児教育があって、小学校教育との真ん中にスタートカリキュラムがあって、これをすべての小学校で実践してもらいたいということで、7、8年前から関わって各学校で授業を見てきました。

今お配りした資料は本校の学校説明会で保護者に説明している物で、この内容は全ての学校で行っていると考えていただいて結構です。ただ、1年生の担任が変わったり、管理職が変わったりするので、同じレベルでは言いませんが、方向性としては、幼児教育で育ってきたものを1年生で大事に、学習や学びにつなげていこうということやってきています。スタートカリキュラムについては、日野の生活科で使っている教科書会社さんが出しているパンフレットにも詳しく書かれていますので、後ほど目を通していただければと思います。田村学という先生が書かれている2ページの、真ん中あたりの丸い絵が書いてあるグラフがあると思いますけれども、今私がお話したことで、ファーストページというのは、小1プロブレム、セカンドステージというのは幼稚園保育園でやってきたことを小学校がスタートカリキュラムで安心してスタートさせる。今、大事なのがどう学びにつなげていくかということで、幼稚園保育園で具体的に活動してきたことを10の姿という形で記録して届けてくれますので、それを私たちがしっかり理解して、スタート、学びをしようかというところを一生懸命それぞれの幼稚園のご意見いただいたり、保育園にお話しいただいたり、小学校の1年生の担任と相談をしながら進めているところです。幼児教育と、小学校教育の共通語であるのが、10の姿という風に捉えていますけど、これはなかなか難しく、目標としてあるんですけども、到達目標ではないし、全ての子供がこんな力がついているという風に評価してくるわけじゃないんですけども、そういう学びをしています。

それが突然なんですけども、読売新聞の7月6日の記事にあるように、5歳児教育プログラムというのが突然出されました。子供庁を作るといような話があった中で出てきたことだと思いますけれども、文部科学省の大臣がどのような形で進めたいというのを、声を出したところでニュース等で取り上げたんですけども、ちょっと勘違いしちゃって、ここまでやらないと、ここまでやって力をつけてから、小学校が受け取るとか。保育園幼稚園でみんな同じ力がついたら良いみたいな捉え方をして、ずいぶん関係者の方が慌てたようです。取材をいくつかを受けたりしましたし、また、文科省の方がわざわざおいでになって説明してくれたのですが、決してそういうことではなく、今までやっていたこと、日野がやってきたことをそのまま継続してもらえば構わないといような話をいただきました。その中で、幼児教育スタートプランのイメージというものが、一番最後のところで、文科省から出てきたんですけど、これ見てみると実は日野がやっていること、10何年も前から取り組んでいること、特に幼児教育の推進ということで、保育園幼稚園が取り組まれていること、そ

れからスタートカリキュラムで小学校につないでいること、そして教育委員会がそこに入ってきて繋いでくださっていること、ということで文科省国がやろうとしていることを、日野の場合にはもうすでに取り組んでいるというふうにご理解いただければと思います。

その中で、やはり幼児教育の中心となるようなセンター的な役割ということで、前回の会議の時には公立の幼稚園が中心になるんだというようなお話で今日まで来ていると思いますし、今までの話の中で補完的になってというような言葉が出てましたが、補完的ってどういうことかなって考えたときに、前回もお話があったように、特別支援のお子さんについてはやはり公立で今見ているような状況で対応するのが一番良いだろう、またはそういう形しかないだろうとなった時には、公立幼稚園、公立保育園が特別な支援を要するお子さんの、私立幼稚園保育園の補完的な役割として重要な立場にあるのかなというふうに感じているところです。ですから、どこの園を残すとか、そういうことよりも、本当に日野は子供の数が減ってきて、幼稚園の子供の数も減っている中で、これから先、皆さんが考えていく結論というのは、どうしてもそういう風になってしまうとは思いますが、これからの幼児教育、考えていく中で公立幼稚園私立幼稚園、そして公立保育園や私立保育園と小学校が連携しながら幼児教育の質を上げていく。質を上げていくっていうのは、どんな力をどこまでつけると言うことではなく、幼児教育の基本である遊びを通して子どもたちが生きる力を含めて小学校につながる、それが大事かなって思います。有意ある段差といって必ず幼稚園保育園から、小学校には段差があるんですね。そこを乗り越えるだけの能力を幼児教育ではしていますので、それがないとダラダラとってしまう。そうではなく、大きな学校、大きな教室、異なった環境に来た時に有意ある段差を乗り越えて、そこから自分たちがやってきたことを自信を持って進められるような、幼児教育をさらに進めていってもらいたい。そして、小学校と連携しながら学びにつなげていきたい。そのためには、公立幼稚園公立保育園や私立幼稚園私立保育園、連携しながら進められるような体制を考えていきたいとか、考えていただきたいというふうに、今日資料を用意しました。充分想い伝えられないんですけども、今後、今までやってきたことを土台にして、さらに前に進んでほしいというふうに考えています。

【会長】

はい、ありがとうございました。「幼児教育スタートプラン」まだ仮称の段階ですけども、そのご紹介をいただいたこと、そしてその内容は実は日野としては10年以上やっているという素晴らしい勇気づけられるエールも含まれていたかなというふうに思っています。そういった中で、理念の部分である公立私立幼稚園、保育園に問わず、全てのセンター的機能、役割を公立の幼稚園が担っていく必要があるのではないかと。かなり中核的な方向付けの意見いただいたかなと思っております。今の委員のご意見を踏まえて、議員の皆様是非ご意見を頂けたらと思います。いかがでしょうか。

【委員】

昭和40年に第一幼稚園、第二幼稚園が、市民の強い要望によって、設立されてから60年近く、昭和43年から幼児教育の質ということを考えながら研究会研修会ということをして、私達は積み重ねてきました。小1プロブレムというようなことがいろいろと取沙汰され、もう一度見直さなければいけないというところで、幼稚園と小学校が近づくというかお互いを理解するために、まず公立幼稚園と小学校が色んな意味で勉強させていただき、交流させていただいてきたんですけれども、それでは、日野市の児童達全ての子供達の事を考えていないということで、もっと幅広く考えていく必要があるということで、今のような4ブロックに分かれ、研究保育を行ない協議会を行ない、その同じブロックの子供達、それから、小学校の先生方、皆さんと一緒に学ぶ機会っていうものを一年に一度ですけど、各公立幼稚園の方では協議会というものをさせていただいています。それは保育園の先生方、それからまだまだ少数ではあるんですけれども、私立の幼稚園の先生も参加していただいているということもあって、私達の役割というものを、そういう研修会等で果たしているかなっていうふうには思っています。

【会長】

ありがとうございます。今のお話も公立幼稚園が担ってきた中核の部分ですね。先程のセンター的な役割という具体例かなというふうに思われます。幼稚園教育要領という、小学校での学習指導要領みたいなものに則って、意図的計画的に。しかも全ての子ども達を包摂し合いながら、子供を育てる公立幼稚園に私も何度もお邪魔させていただいて、本当に感銘を受けるような先生方の関わりを拝見しております。そのようなセンター的な機能というのでしょうか、公立幼稚園ならではの良さというのは、やっぱり活かしていきたいという思いが委員から聞かれたのかなというふうに思っています。保護者の皆さん、いかがでしょう。

【委員】

質問してもよろしいでしょうか。今4ブロックというお話を伺っていて、おそらく五幼がなくなったことで、その4ブロックのうち1つの中核が今欠けている状況にあるということでもよろしいですか。

【委員】

すみません、私が今4ブロックの中身についてわからないのですが、3月まであったということだと、そこは今後どう整理していくのかはわかりません。

【委員】

その4ブロックを、公立の幼稚園が中核ということであると、3ブロックにシャッフルす

るのでしょうか。

【委員】

研究会自体は五幼でやっていたものは別の幼稚園まで行って、という形でやっています。

【委員】

なるほど。

【会長】

おそらくそのブロック研究会というのは、研究の方法なので、やっぱり理念が整って、それに基づいてビジョンでどのようにやっていくか。まずは我々の所が一番の大枠をここで話し合いたいなということですね。どのような役割を公立幼稚園が担っていくべきなのか。そのあとにまた量の話が出てくるのか、あるいはその方法の出てくるのかなというふうに思います。

【委員】

やっぱり保護者として、幼稚園と小学校の連携はすごくありがたいです。夏に、小学校の大きいプールに入ることができたり、今まで年少さんが年長さんと遊んでいたそのお兄ちゃんが新1年生になって、小学校で再会した時に、〇〇ちゃんがいたとか〇〇君がいたって言ってお互いに喜びあって、小学校ではこんなことするんだよ、国語ってこういうことだよみたいな事を教えてくれて。それを園児はすごく楽しそうに話してくれて。うちの子達は〇〇幼稚園に行っていた時に、〇〇小には行かなかったんで、そういうお友達も何人かいて、でも先生方が滝合小学校でも豊田小学校でもこういう感じなんだよっていうのを教えてくれたので、子供達が違う小学校に行っても、スムーズに学校生活が送れたのと、個人的な話なんですけど、〇〇幼稚園で〇〇小の5年生の兄ちゃん、お姉ちゃんが遊んでくれた時に、やっぱそのお兄ちゃん、お姉ちゃんが幼稚園の前を通ると、みんなで一斉に手振ったりとかして、園の方に入ってきてくれて、降園後に一緒に遊んでくれたりして、5年生のお兄さんでまだまだこんなに優しく遊んでくれるんだなあっていうのと、いざうちの子が〇〇小学校に入って、ばったり会ったときに、お互いに久しぶりみたいな感じで。2年後だったんですけど、その5年生の子が中学生になっても、あの〇〇ちゃんっていう感じで、そういうつながりがあったのが凄い有難かったです。あと小学校との連携もそうなんですけど、すごい保護者としていいなと思ったのが、中学校との連携も、職場体験っていうので、お兄さんお姉さんが遊んでくれる、先生となって遊んでくれるっていうのも、すごい保護者としてもありがたかったです。

【会長】

ありがとうございます。とりわけ幼小の連携の部分での互惠性というか、お互いにその恵みを与え合える、その可能性についてもお話いただいたと思います。

【委員】

私の娘が今、小学校2年生なんですけど、ちょうど年長の冬を越した頃に、コロナ禍になってしまって、幼稚園もちょっと行きづらいというか、放課後に遊べなかったりということがありました。それまでに、小学校に行く機会が何回かあって、すごく楽しみにできるというか、もうちょっとで1年生になれるとか、そういう気持ちも芽生えていました。実際に今、給食体験とかできなかつたって言っています。あと1年生になってから、6年生のお兄さん達がお世話係をしてくれて、それもなかなか限りのある中での兄さん達との戯れだったりして、やっぱり少なくはなっているんですけど、上の人達を見るとか、甘えさせてもらえるとか、そういうのって子供の中で少なからず安心とか、自分もこう出来るとか、いろんな面がすごく芽生えているんだなって言うのを感じています。お世話をしてもらったのが少なかったことが寂しかったのか、もうちょっと甘えたかったのについていうのを未だに言っていて、今年的一年生はちょっとうらやましいなあとか、やっぱりそういうふうに、小学校に入ったからといっていきなりお姉さんになるのではなくて、甘えられる上がいるとか、幼稚園に行ったらお姉さんの顔が出来るとか、いろんな側面が育つと言うか、なんかそういうのが人として、無理のしない成長の仕方というか、そういうことを感じました。

【会長】

同じく、やはり上の子と積極的に関わりやすいのが公立幼稚園の一つの良さだという意見かなと思います。

【委員】

幼少連携の部分で、うちの息子は障害があるんですけど、〇〇幼稚園にいたときに、小学校に遊びに行ったりとかあったので、小学校をどうやって説明しようって、普通の障害の無いお子さんは、小学校に行くっていうのを理解してくれて上がっていくんですけど、知的障害とかある息子に、小学校っていう概念をどう説明しようと思ったときに、やっぱり百聞一見にしかずで、幼稚園でみんなと一緒に行って、4月になったら、小学校になるんだよとか、小学校っていうのはこういうところだよとか、給食が出るんだよとか、そういった体験を実際にさせてもらったのは本当にありがたいなと思いました。エールの児童発達支援事業にも通っていたんですけど、エールが発達支援事業のクラスでは、幼小連携とかはなく、小学校に給食食べに行ったりとか、そういった行事はなかったと思いますので、やっぱりそこで幼稚園に公立幼稚園に行って、小学校に入る前に体験できたというのは本当にありがたかったなと思います。なので障害がある子こそ、そういう幼小連携はとても大切なんじゃない

いかなって。4月からの生活をイメージしたりとか不安なくてきたりとか、そういったこともきっかけになるかと思うので、よりそういう幼小連携っていうのは大切だなと思いました。公立幼稚園の質っていうところで繰り返しにはなりますが、特別支援教育という視点で思いますと、必ず加配の先生が付いてくださって、あと1年、2年で選べるっていうこともすごくありがたいです。年中で入るにはちょっと心配だなと思ったら、年長からでも入ることができるので、これが私立幼稚園だと、親の都合で言うと、園服だったり入園費だったり、そういったものがたくさんかかるのに一年だけとか思うと躊躇したりする部分がありますが、公立幼稚園は園服も安かったり、入園費も安かったり、そういったこともあるので、すごく親として障害持つ子の親としては、チャレンジしやすい環境っていうのもありがたかったです。なので特別支援教育という面でも、公立幼稚園の質っていうのはあるんじゃないかなと思いました。

【会長】

はい、ありがとうございます。特別支援教育ということで、今日お休みの副会長から意見いただいています。公立幼稚園に補完的な役割として、いわゆる特別支援の役割を担っていただくのは当然というか、大事なことなんけども、「公立幼稚園＝特別支援」だけに特化したというのはどうかなと。そういうご意見を仰っていました。これは私も全くの同感で、やっぱりいろんな人をごちゃ混ぜにして、違いを包摂できる、お互いに包み込み合える人として育ててもらえるような、そういった考え方が妥当なのかなというふうに思います。当然ながら、量の部分で言うと、加配が付きやすいというのは、公立幼稚園の良さであることは間違いないと思いますので、そういったみんなで一緒にという、そういう姿が見えやすいのが、いわゆる公立幼稚園なのかなと。そんな捉えでよろしいでしょうか。ありがとうございます。

【委員】

やっぱり、公立幼稚園の良さみたいなことを話すときに、やっぱり加配のことがぱっと浮かんでしまうんですね。でもそれを全面に出し過ぎてしまうと、あの加配を受けたい子ばかりが集まってしまえば、これはよろしくないんじゃないかっていうふうに思っていて。公立幼稚園に限らず子供にとっての居場所としていろいろ手当てが出来るのであれば、公立私立問わずどこに行ってもその子はいいんだと思うんです。だけど今、公立幼稚園の在り方っていうことを考えたときに、先生方のノウハウっていうのを活かさない手はないなっていうふうに思っていて。で、前回のとき、ちらっと話に出ましたけれども、地理的にエールと東の方との距離があるので、そこで加配の経験を積んだ方たちが、地理的に距離がありエールが遠いという人たちをフォローするとか、そういう風に運用していけないのかなっていうふうに思いました。今日頂いた資料の通園事業児童発達支援事業「きぼう」のクラスの数がかかれていて、利用者に実数が書かれているんですけども、並行クラスっていうのは、いわゆる時々通ってくるのかなと。固定で毎日ここに通うっていうのが1行目2行目の人

達なのかなって言うふうに思うんですけど。どうなんでしょう？

【会長】

では、「きぼう」に関するところは事務局からご説明をお願いします。

【事務局】

補足させていただきます。概ね委員が言われたとおりでして、3番の通園事業、通称名「きぼう」と書かれておりますけれども、上2行、3歳児クラス並びに4歳児5歳児クラスにつきましては、通常週5回、年齢よっては週3回という世代もございますけれども、日常的に送迎バスに乗りながら市内から療育のために集まっているクラスになります。それから下2段の並行クラス、同じように3歳児、4・5歳児クラスがございますけれども、こちらは幼稚園や保育園に通いながら、必要な時間数をエールで、療育していただくというクラスで、概ね2週間に1回など、頻度が決められている事業になっております。以上でございます。

【会長】

ありがとうございます。委員いかがでしょうか。

【委員】

ありがとうございます。言っていることが矛盾するんですけど、加配経験を活かして、子どもたちの居場所を地理的にという気持ちがあるのと、定員に対して人数が減っていったという状況は多分、「来年この幼稚園あるのかしら？」っていうふうに思われてしまうと思うんですよ。途中で転園しなきゃいけないってわかっていたら入れさせたいとは思わないので、前回の時にペンキが剥げた園舎をご説明頂きましたけど、ちょっと小綺麗に整えて、あの来年も再来年も園児を受け入れますっていうふうにアピールしていただくと、いいのかなって思いました。定員に対して、例えば七幼の定員60名70名に対して、実際は15名29名っていう話なんですけども、これは教室はそれだけあるけれどもっていう話なのか、2クラス設営するために、そこに幼稚園教諭も配置済みであって定員が割れているってことなのか。現状も2クラス体制で人数が手配されているんですか。

【事務局】

今委員が見られたのは資料8でよろしいでしょうか。第一回にお配りさせていただいた資料8です。市立幼稚園の年度別の園児数学級数について、5月1日付の日付で過去5年間整理したものです。現状令和3年度なんですけれども、二幼と四幼につきましては、それぞれ4歳児5歳児1クラスずつ、それから七幼につきましては、定員の欄をご覧くださいますと、他の園と比べまして人数が多くなっておりますので、基本は2クラスずつの編制体制となっております。で現在定員割れにつきましては、二幼四幼については、今の通り1ク

ラスずつにおける定員割れなんですけれども、七幼につきましては、現実的には今 1 クラスずつの編制となっておりまして、定員割れの数については、2 クラスから差し引いた定員割れの人数を記載しています。

【会長】

教員の数は 2 クラス分で配置されているのか、それとも 1 クラスで配置されているのですか？

【事務局】

いずれの 3 園も、今 1 クラスずつの教員が配置されています。

【委員】

ありがとうございます。教室が余っているという状態ですよね。要は園舎としては定員を迎えることができるんだけど、教員は 1 クラス分しか現実には配置していないということであると、数のマジックというか、ものすごく定員割れしてるっていうふうに見えてしまうなと思っただけです。

【会長】

はい、ありがとうございます。

【委員】

保護者の方からのお話の中に、幼稚園と連携する、上のお兄ちゃんがお姉ちゃんが、っていうところがあったと思うんですけど、6 年生が、1 年生のところにお世話に行くっていうのはあるんですけども、今年私も 1 年生の補助に入りながら見ていたときに、6 年生の男の子なんですけれども、「先生意外にできるんだよね」「それってかなり上から目線だよね」なんて話をしたんですけど、「できないと思っていたの？」「うん、もう少しできないと思っていたから、手を貸してお世話しなきゃいけないんじゃないかと思ってたんだけど、準備とか片付けとかしっかりできるんだよね」と言うことをこそっと言ったと思ひまして。それって幼稚園保育園で育てていただいた力がそこで発揮しているっていうことだと思うんですね。ということは、そういうことも幼稚園小学校の連携の中で、教員の中でもそういうところは意識しながら取り組んでいかなければいけないことなのかなと思ひました。それが生の声で子供達から出ているってこともあるということはこちらでお伝えしたいなというふうに思ひました。準備の時だけではないんですけれども、子供達が生活科などで学んでいる時に、6 年生も一緒に走りながら遊んでる姿を見ると、こま回しができなかつたりして逆に教えてもらったり、けん玉ができなくて、「意外にできるんだね」と 6 年生の子が 1 年生を褒めている姿だとか、一緒に教えてもらいながらやっている姿とか見ていると、ほんわかする

ところがあって、これもまた幼稚園保育園の遊びを通して学んでいることが、また体験を通して身に付いてきているものがあるんだなっていうのが見て取れるで、小学校の6年生で忘れてしまっているところもあるんだろうけれども、6年生からすれば、下の子たちの生活の様子を見ながら学ぶところでもあるし、これは下の学年、また幼稚園との交流を通してすごく有意義なことなんだなと思っています。なので、できればコロナ禍ではありますけれども、そういう交流がもっともっと密にできればいいなというのは思いますし、もし自分が6年担任であれば、積極的にやりたいなと思います。

【会長】

具体的なお話ありがたいです。

【委員】

幼少連携ということで色々と考えてみて、正直、本当に難しい問題だなというふうに思います。小学校との連携という意味で言うと、八小としては、実際に卒園して入学してくる園児は私立の方が多いわけなので、小学校から連携で何かをやりたいとか、文化行事をやるので招待状を出すとか、そういった時に、私立公立に偏りが出ないようにと、どちらかだけをやるということはしないようにと思っています。プールの交流だとか、実際にやれたのは地理的に優位な第五幼稚園で、水着で歩いて来られるような状況でしたので出来ました。私立幼稚園にもお声かけをして機会があれば、一年に一回だけでも来るとか、私立の幼稚園もそういう交流を通して、教員自体も実際に私立の幼稚園に行って、1年生の先生が出前授業をして、ギャップをなくすための努力をしたりしてるので、思い出もたくさんあります。同時に、同じ教育委員会管轄の公立幼稚園であると幼小連携している幼少教研という研究部会で、幼稚園の実情とか、同じ目線で見ると、例えば道徳について、幼稚園では無いけど子供達の心の発達についてっていうところで、同じ土俵で研究だとか、あの教員間の交流が出来るっていうのは、公立幼稚園の良さだなという風に思っています。

今回第五幼稚園が閉園することになって、式典があったり、セレモニーがあったり、記念になるものを残そうと、いろんな動きがある中で本当にびっくりするぐらい保護者や地域や卒園生の思い入れが強くて、園庭の木一本に至るまでなんとか残せないかっていうような話になって、私立の幼稚園でもあるんだと思うんですけども、やっぱり地域の中で中核的に果たしてきたものがあるので、それがなくなってしまうことに対してなんとか機能として残していくことも大事なかなというのはあります。

【会長】

委員皆様からご意見頂きまして、改めて私立も公立でもできることはあるんだけど、センター的な役割、機能というのは、公立幼稚園の方がやりやすそうな雰囲気少し見えてきたかなと思います。公立幼稚園の先生方のノウハウみたいな言葉がありましたけど、そういっ

たものも、非常に重要になってくるのかなというふうに思われます。また、委員から出された「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」、こういう具体がありまして、このような具体に向けて、公立私立合わせてみんなでこういう姿をあの目指そうという、新しい取り組みのセンター的機能という形で、公立幼稚園の先生方にはその中核になっていただきたいと思えます。個人的な見解としては、到達目標を掲げている教育はあまり先進国ではないなと思っていて、日本は相変わらず到達と評価でABC、54321をつけて喜んでいて、親も子もそれで一喜一憂しているんですけど、そうではなくてこの姿というのはそれを発揮しているプロセスに価値がある、という言葉なんです。なので単純にこれができるできないというチェックのものではなくて、こういった姿を多分に発揮させようとする、そういう幼児教育の在り方を、ぜひこれからセンター的機能を務めるだろう公立幼稚園の先生方に中核的に担って頂けたらいいかなと思っています。加えて出たお話としては、インクルーシブな園を作っていけたらいいんじゃないかと、そういう意見が出たかなというふうに思っております。オリパラが終わりましたが、21世紀は成熟社会なので、明らかに共生社会でなければならない。いろんな人たちがそれぞれ違ったでこぼこを、お互いに補完し合いながら、それぞれの持っている力を最大限に発揮させ合うような、そういう社会を形成していかなければならないとなった時に、小さいうちからいろんな子がいて当たり前なんだよということを、実体験として学ばせる。そういった園として、これから公立幼稚園がアップデートしていく、そういう必要があると、そんなご意見が出たかなというふうに思われます。

前半30分位というふうに私申し上げたのが、少し時間がオーバーしてしましまして、おそらく、細かいところまではなかなか詰め切れないかなというふうに思われます。センターで機能を担っていただく、そういうアップデートを図る。具体的には幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を追求すること、そしてインクルーシブなそういう共生的な社会を担うための幼稚園として再構築していこうと。そのような形でまとめるということはどうでしょう。それ以外の細かい点については、別途検討委員会等を、もし開くことができるのであれば。事務局どうでしょうか。

【事務局】

そうですね。最初に委員からも国の動きの話がございました。調べてみたら、相当の量の議論がされていまして、これまでの幼児教育、今後の幼児教育の在り方として、先程おっしゃっていただいたような小学校との接続の部分とか、学習指導要領も変わって、小学校、中学校と学んでいる形があるんですけど、実は幼児教育から学ぶところがいっぱいあるんだろうと思いました。

一方で、全国的に見れば、幼児教育保育というと公立だけじゃなくて、私立など設置主体は様々です。施設類型と言いますけども、幼稚園もあれば、保育園、認定こども園もあるなど色んな形があるんです。子供の人口も減っていくということもある中で、それぞれの良さとかを活かしながら検討する、今までやってきたことを大事にしながら発展していく。こう

ということが今国でも議論されていますし、今ここで、議論いただいたこととほぼ一緒なんです。私達もそこは少し時間をかけながら、大きな方向性はここで議論していただいて、具体化していくと。それには、当然学校の先生方や幼稚園の先生方に加わっていただく必要があるかなと思います。こちらの議論の中では、質として在り方として、どんなポイントがあるのかということと、また量としてはどうなのかという、大きな方向をここでご議論頂いて、別途また時間をかけていただくということでもよろしいかなと思います。長くなりましたが以上でございます。

【会長】

わかりました、ありがとうございます。我々が頂戴した諮問事項は市立幼稚園の適正配置でした。そのために、いわゆる数字の話だけをしても良くないので、その前提として理念のところ、今後の幼児教育の在り方について、皆さんにご意見をいただいたところであります。詳細なところ、今後の日野市の幼児教育の具体的な検討については別途委員会の設定、設置するという形にさせていただきまして、ここではこれからのその方向性に沿ったセンター的機能を、公立幼稚園に担っていただきたいというところで、いわゆる質の部分は終わりにしたいと思いますがいかがでしょうか。

【委員】

一つだけよろしいですか。今センター的機能というところで、今日も来年度の入園をしたというところで、エールから面接というか、幼稚園に見に行きたいっていうことでお話がありまして。どうぞ来てくださいということでお伝えしたんですけれども。私、東京都の特別支援児の割合というのをちょっと調べてみました。1番多いのが練馬で約3割0.303というところで、板橋、中野、葛飾、江戸川、6番目が日野で0.211という、2割強の支援のお子さんをお受けしているというところであります。大体、学級数で今言った6区市のうち4区日野市は、3歳児保育がないところ、4、5歳児保育なんです。しかもその中で2番目の板橋はもう一園しかなく、だいたい3割のお子さんが支援児として受け入れている。ということは、今後日野市の中で、園数が減っていくというような方向になった場合に、みんなが本当に未来に向けて輝く笑顔で毎日を過ごしてもらうために、その役割を担うのは、もう市立だけではどうにもならなくなるといったときに、考えなくてはいけないかなというふうに思いました。

【会長】

ありがとうございます。具体的な数字を含めてお話しいただきました。この後、量的な話もしていくところではあるんですが、委員の方から、公立の幼稚園だけでは、支援のお子さん達を担いきれない可能性もあるというお話をいただきました。そういった際、私立の幼稚園で、どのように受け入れられるか、そのあたりを少しあのご意見いただければと思います

が、いかがでしょうか。

【委員】

市から保育カウンセラーの派遣して頂いていますので、各園でそういう子達が居ないってことはないんです。うちでもエールに通っている子たちは5・6人はいると思うんです。加配が付く付かないということは、とても大きなことにはなるんですけども、私立も全く加配を付けられないということではなくて、フリーというのがいますから、経験豊富な職員がいたりしていますので、支援が必要な子を全く受け入れないということではないんです。受け入れてはいますけども、そこは各園のやり方も違いますし、一律に何名ということとは言えないんですけども、園長会なんかでもかなり増えてきているよねって話は出ています。

【会長】

ありがとうございます。日野市で作りました第3次教育基本構想の理念が、「全ての命が喜び溢れる未来を作っていく力」こういう力を育成しようということによっております。誰1人取りこぼすことなく、それぞれの子供達が本当に明るい未来を進んでいく、そんな力をどこでも育成できるような、そんな幼児教育について検討していきたいと改めて思った次第です。ありがとうございました。

それでは、ここからは少し具体の部分、いわゆる適正配置にかかわるご意見を委員の皆様からいただきたいというふうに思っております。これまでは幼児人口の減少であるとか、保育ニーズの高まりであるとか、運営面の課題、財政状況、公共施設の見直しとか、運営のコスト、施設の老朽化等も含めて、そんな話を第2回は中心にしていまいりました。それらを踏まえて、ぜひ皆様に適正配置、いわゆる量とか、具体に関わるキーワードをご発言いただきたいというふうに考えております。リアルな話になってきますけども、ぜひ皆様のご意見を伺えたらいいかなと思っておりますので、よろしく願いいたします。

第七幼稚園というくらいですから、少なくとも7つあった園が、少しずつ減ってきて3園になってきているというのが現状です。委員から第五幼稚園が閉園する際のお話を伺って、1つ園を減らすことはなかなか簡単なことではないということは皆さんも理解されているところかなと思います。一方で数のところ、その辺りを踏まえて、どのような着地点を見出していくか。適正なところについて皆様から率直なご意見を頂けたらいいかなと思います。

【委員】

日野市のお子さんの人口も減ってきているとは思いますが、例えば第1子で公立に入って、公立の良さは重々分かっているだけけれども、働かざるを得ないので、下の子は保育園に行きますっていうお母さんも周りに何人もいて、そうすると公立に入れたいけども、公立の保育時間だけでは働けないっていう現状があるんじゃないかなと思います。多分

公立は出来た当初から2年保育で、なおかつ9時から2時で降園っていうのはもう最初からのことでしょうか。

【委員】

初めは1時半でした。それを2時に伸ばし、水曜日の11時半を12時まで延ばしました。

【委員】

そうなんです。これから、例えば3年保育になるとか、もう少し保育時間が延長されるとなれば、きっと働くお母さんには公立に入れたってお母さんも少なからずいらっしゃると思うんですけど。ここはどうにもならないですか。

【会長】

保育時間のことですね。延長が可能かどうか。どうでしょう。

【委員】

調べたところ、今、都内でおおよそ164園のうち88園、約50%、こども園を入れてですけども、預かり保育をしているというのが今の状況ではあります。

それから今、手元に2枚半に13人の市立幼稚園の職員の想いがすべて詰まったものをうそ偽りのない言葉で書かれたものがあります。この中には、正直、若手と10年未満とあとはベテラン組とで分かれて、書いたものがまとめたんですけども、もう若手に関してはもう本当にあの生きがいを持っているので、教師と一緒に成長していける保育を続けていきたいというような切なる願いが文言としている言葉で、若いんですけども、保護者にとっても大切な幼稚園っての公立幼稚園というのは大切な存在であるということで、存続を願っているという言葉が書いてあります。特別支援のことももちろん大事だということも書いてありますし、ですがその中にベテランになると、もういろんなことがわかってますので、3歳児保育、預かり保育、延長保育の実現がなければ、これから園児数を増やすのは難しいだろうと言うことで、ここで終わりではなくて、ここから新たなスタートとして、ここで市立幼稚園の在り方をもう一度再検討、新たな未来に向かっての日野市流の幼児教育ということを考える、機会をぜひ作っていきたい。本当に日野市の全ての子供達の事を考えた日野市の公立幼稚園の在り方というのを、是非教育委員会、市民の皆さんと一緒に考えていきたいというふうに思います。

【会長】

ありがとうございます。いわゆる教育的な価値についてですね。これまでの話の中にも多分にでてきたのかなというふうに思われる中で、適正なところ、おそらくここで

話し合われることになるのかなと思います。委員どうですか？この数字が出て、園長先生として今3園あり、3園の園児が減ってきている中で正直なところ先生としてどのくらいの園が適正だと思われませんか。

【委員】

正直、私達は子どもを育てることが役割であるので、園児が集まらなければ、機能しなくなってしまいます。それは残念だなというふうに思います。人数でいうと、10人なのか8人なのかその辺は私がここで答えする事は厳しいなとは思いますが、やっぱりある程度の入園の申込数がなければ、集団として成り立ちにくいところはあると思います。お互いに刺激をし合って、お互いに認め合っているとところでは、ある程度の人数が揃わないと幼児教育として、互いに育ちあうというところでは厳しいと思います。

【会長】

具体的な数字は、ということですが、先程の幼児期の終わりまでに育ててほしい姿の中に、例えば共同性であるとか、言葉による伝え合いとか、豊かな感性とか表現っていうことになると、他者の存在、もちろん大人であっても不可能じゃないんですけど、同じぐらいの年頃の人達との、集団の中でのその学びということは不可欠なのかなということはあると思います。その中でどのくらいの人数なのか、これは改めて検討しないといけないのかなと思います。

【委員】

話を聞いてると、私立と違うのは、経営感覚なのかなという気がするんですね。私立は、どんなに良い保育をしていたと自分達が思っても、園児が来なければ潰れちゃうんです。そこに税金の投入とかありませんので、先程お話が出た、兄弟の下の子を保育園に行くっていうのは、このところ私立でも顕著に出ていると思うんですね。今まであんまりなかったんです。ただ、コロナで収入が減って、お母さんが仕事に出る機会が多いのかもしれないし、一時的なことかどうか分からないんですけども。どの園でも、下の子が保育園に行ってしまうということは出ています。数字だけで言えば、現状3園で98名、資料は8を見ると、4歳児の合計をすると68なんです。5歳で入ってこなければ、来年の5歳児は人数が減っちゃうと思うんですよ。この人数でしたら私立だったら経営は非常に難しい。今日野の中でも、98名より少なくても経営ができるのは、母体が他にあって、そこからの収入があるとか、上に大学があるとか、そういうところだけなんです。この人数では、うちだったらきつとやっていけないんじゃないかと思います。確かに私立は、預かり保育などを強化していますけども、これは全く補助がないので、保護者から料金を頂かなければできないので、一応そういう形でやっているんです。確かにいろんな面がありますが、私立だったら無理じゃないかなっていうのは感じます。

【会長】

あの経営の視点からのご意見だったのかなと思います。ありがとうございます。

【委員】

3園でやってきているっていうこともあるんですけども、これ以上少なくなるのはどうなんでしょうか。子供達にとって…。難しいと思います。

【会長】

わかりますね。私もお邪魔しているので、とってもいい保育教育をされているなという思いしかありません。その中で、親御さんの生活の変化により、公立に通わせられる方が減っているのが現状かなと思われまます。

【委員】

本当に難しいと思います。今残っている3園の位置的にも、残れるのであれば、3園が残っているのが位置的にも良いと思います。でも実際、本当に人数が少なくなってしまうと、委員がおっしゃったように、集団での教育っていうところを考えると本当に…。なんか難しいですけど、やっぱり考えてしまいます。私も上の子の時に、もし公立幼稚園が3年保育だったとしたら、小学校に近く、いろんな学びができるというか、連携しているところっていうのはすごく魅力的だったんだらうなと今は凄く思いますし。幼稚園に通う時間だったりとか、このままであると、やはり厳しいのかなっていうのは感じます。この間説明いただいたように、もし第一子で幼稚園を考えた時に、今いろいろな地震ですとか、災害が結構ある中で、古い園舎を見て、その後私立の立派な園舎を見て、どちらに通わせたいかってなると、先生達のその一生懸命の姿っていうのは、なかなかわかりづらい。初めて幼稚園を選ぶとなったら、私立も公立も先生はしっかりしていて、深さとか、いろんなことは見えない。やっぱり新しい園舎の方に目がいくっていうのは素直な気持ちだと思うので、そういう建物だったりとか、選ぶ指針がある中で、今の現状で選んでもらうのはなかなか厳しいというのは素直なところですね。

【会長】

園舎とか、いわゆる外見ではなくて、中身で選んでもらうのはなかなかなかなか難しい。まからわかりづらいところですよ。

【委員】

質問してもよろしいでしょうか。小規模の学校の場合、例えば一年生、同じ教室で学ぶことはできますよね。複式学級、幼稚園はできるんですか。というのは、今委員もおっしゃっていましたが、今の4歳児が来年5歳児になりますよね。9人、10人、15人しかいなく

て、新しい入園の子がいなかったら、激減するじゃないですか。その時に1つの教室で4、5歳児を見て、教室は2つしかないけれども3歳児も受け入れるってことができないのかなってちょっと思ったんです。3歳児はどっちとくつつくのが良いのかわからないけど、ミックスで触れ合うことを考えたら、公立幼稚園が3年保育を始めるというのは明るいニュースになるのかなっていうのと、先程の「きぼう」の表なんですけれども、3歳児の通園クラスの子達は定員いっぱいまでいるわけですよ。でも、併行クラスの3歳児で利用者がいないというのはなぜか、3歳児で、どこかに所属した状態でここに通うニーズがないのか、自宅で見ているのかどちらなのかと少し思いました。私の第1子が5ヶ月ぐらいのときに、同じような月齢の子と並べて置いといたら、その子がハイハイする様子を見てハイハイし始めたんですよ。同じ月齢なり学齢の子達と一緒にいるっていうことは、大人が思うよりも刺激になるのかなと思うので、おうちにいる子がいるのであれば、居場所がある方がいいかなと思って、副籍ができるのであれば、教室の数に関わらず、受け入れを広げて3歳児4歳児とつないでいくことができるのかなと思いました。今まで五幼でノウハウを積んでいた先生方が、今日野市のどこかにいらっしゃるわけですよ。カムバックしていただいて、ノウハウを生かしていただければと思いました。

【会長】

そもそも日野が3年保育をやってない理由は何でしょう。

行っている公立幼稚園もある中で、日野が2年保育であるについて。

【事務局】

1番最初にお話してるように、元々私立と公立の成り立ちみたいなのところがあってということかなと思っています。そもそも幼稚園もあれば、保育園もあります。子供の学びと育ちの場っていうのは、多様な場があります。その設置主体というのは、公立と私立です。小学校中学校というのは、義務教育って言葉がありますけども、幼児教育って、成り立ちからちょっと違うところがあります。それぞれの違いは対立の構図ではないと思っています。例えば、小学校から見たら、その地域にあるお子さんが通っている施設というのは幼稚園もあるかもしれないし、保育園があるかもしれないし。それぞれの方向、考え方とか成り立ちというのも、それぞれあるんだけど、そういう多様性をちゃんと認めて、お互いの強みみたいなのところ、特色を活かしながら。幼児期から、小中だけじゃなくて高校ぐらいまでという長いスパンで子どもの育ちとか学びを、どう見ていくのかということになってきているんだと思うので、是非そんな視点で議論をしていただきたい。

一方で、先程質のお話と量の話が出たと思うんですけども、じゃあその質として公立の園は、どんなものを持っているのか。教育委員会からお話をさせてもらおうと、私達は私立も公立も含めた中で、これからの子供の人口が減っていくという中で、どういう教育を日野市の中でやっていったらいいのかを考えていかなければいけないと思っています。マンパワ

一とかっていうことも、今後はいろいろ限られてくるかもしれません。子供の数が減っていただくだけではなくて、働く人も減っていくかもしれない。若い人たちにとっての魅力のある、働きがいのある場所。今までの概念だけではなくて、どういう体制を作るのか。私は設置主体による対立の構造ということは考えていません。お互いの良さは何か、お互い足りなかったところがあるかもしれませんよね。今後はより交流してもらうためにはどうアプローチしていったらいいんだろうとかっていうことを考えていくことが大事なかなと思います。

特に特別支援のところでは先程 3 割ということ、私も調べてみたんですけど、やはり多いところの割合ですと 3 割ぐらい。全国的にもそれぐらいになる。あと偏りが出てきたりもします。今私立の話もありましたが、受け入れられるようになってきている。より受け入れてもらうためにはどうしたらいいのかなということ、聞いていて思いました。いろいろ考える事があると思うんですけど、今の入り口の話で、2 年保育がどうしてっていう所例えば、日野市の中での成り立ちがあり、量のところで役割分担をしているところかなと思います。

合わせて、そもそも私立幼稚園も定員割れをしている状況だということ、子供の数が減ってきているので、もしかしたら、今後、保育園もどうなのかなと。ある意味量の議論はしてきたんですけど、これからは質が重要になってくるので、質を踏まえて、選択と集中みたいな話もしていただいているので、そういうことをよく考えて、1 番いいやり方を議論していただくということがこの場かなと。色々話をしてしまいましたけど、2 年保育については、成り立ちだという風にお考え下さい。

【会長】

私立の補完的な役割ということで、3 歳児を受け入れなかったという歴史があるということによろしいでしょうか。はい。今、機能強化で 3 歳児を受け入れようとしても、私立の定員割れをしているという中で、どの程度ニーズがあるか。「ありそうだ」で議論するのは難しいかなと思われるので、そこは根拠が無いと難しいかなというところがあります。

【委員】

障害のある子との共生というところで、公立幼稚園の良さがあるということをお話をきて、考えていたんですけど、実際に配慮の必要な子で、加配の先生ばかりついても、難しいなと思って聞いていたんですけど、先程委員のお話があったように、公立幼稚園だけで今後受けていくのではなく、私立幼稚園でもそういった理解とか支援が広がっていくと、特別支援の面での共生という意味でいいのかなと思いました。

そして、支援が必要でないお子さん達にも、公立幼稚園を選んでもらうってところ、その在り方というところが大切になってくるのかなと思いました。配慮のいるお子さんばかりが集まってしまっても難しいなとは思ったので。実際に全国的にも支援の必要なお子さんが増えていく中で、それを公立幼稚園だけでやるのではなく、日野市全体でやると

いうところは大切だなと思いました。

【会長】

先程互惠性の話を致しましたが、片方だけにメリットがあることは、実はそんなになくて、あのケアをしている小学校高学年にとっても、小さい子と触れ合うことはすごく大きなメリットがあって、お兄ちゃんお姉ちゃんをやる中で、らしさを学んでいく。これは近い年齢でもそうですし、委員がおっしゃったと思いますが、園児同士でもそういうことがあると思います。むしろインクルーシブの強みとして考えていく必要があるのかなという感じがいたします。

【委員】

本当に難しい話だと思います。公立が担う役割というものを、私立と比べるっていうのはとても難しいことだし、我々は就職した時から経営という力がない中で進めてきた時に、現状を考えると100人切った園の経営は成り立たない。じゃあどうしたらいいのか。そういうところの重要性に対して、民間ができないところを進めてきているところは現実で、何をそこに位置付けるかというのは難しいところだというふうに思います。ここで、あそこはなくそうとか、あそこをくっつけようというのは、現実考えると、なかなか考えることもできないし、考えられない。だけれども、公立も私立も保育園も幼稚園も子供が減っていってしまう中で、私達小学校もつい最近までは統廃合があって、ひょっとしたら一小だっただけ対象になるかもしれないよ。三小だっただけ、駅のそばでもと言われていた中で、大きな目で、大きな見方でどうしたらいいのかと悩むところです。日野全体の子供達を育てていく中で、今は垣根があったりして、幼児教育という部分で、小学校が連携できないんですけども、幼児教育というところで1つかたまっていくこと。そして小学校というところと連携していること、その連携というのは、子供と子供が連携する。そこには大人の意図があり、環境があり、学びがあり、大人も成長することによって、相手を知ることによって自分の教育が充実していくっていう関係を、本当にみんなが共有していく教育にしていけないといけない。そのために何するんですか、そのためにどこを潰すんですか、みたいな話になると難しいなと思います。ただ、現実としては、やはり90何名では経営は成り立たないという現実を聞いたときに、スタートの方向性が補完的な立場という状況であったとすると、考えていく方向というのは似てくるのかなと。でも幼児教育が本当に良くなるように、それぞれが努力して行きたいなと思います。

【会長】

私が勤務している大学は横浜国立大学です。でも国立じゃないんですよ。今国立大学法人なので、私は会社員と同じ立場です。教育学部の代表をしていて、学長に来年度の人事のお願いに行きました。そんな簡単に行くわけないだろうと一蹴でした。法人化前より、教授が

3分の2になっています。そのくらい、経営の論理が入ってくると、バツサリいかれてしまうんだなと。100人教授がいますので、その代表で私はお願いしているところなんですけども、各先生方は、〇〇教授が退職したからという今までと同じ論理で進むんです。私達もそういう情がありますので、極力現状維持を図ろうと持って行きますが、経営でいくと、そうはいかないと言われてしまうのが現実です。ここは公で、少なくとも市立の幼稚園適正規模の検討なので、すべての命をフォローするために、みんなの幸福を追求するために公があるわけであって。でもその中に、やはり市としての経営、マネジメントは絶対やってかなきゃいけないと。入ってくる収入が決まっておりますので、その中でどのくらい支出があるのか、適性を見極めなければいけない。そういう時期に来たのかなというご意見だと思います。先生方のご意見もわかるんです。私も全く同じ立場やっていますので。みんな現状維持を求めます。だからその通りに行かないっていうのも、今の私の職、役割上感じているところもありますので。でも第2回で話になった通り、先生方にはちゃんと職を続けて頂けるという、そういう保証があるというお話もいただけたと思いますので。その辺りで適正な配置、量の部分について検討していく必要があると思います。

【委員】

本当に当たり前にあるものと思っていた幼稚園の存続について、こんなに考えたことなかったんですけども、今のお話、いろんな話を聞いた中で、残すための理由づくりを考える会にしては建設的じゃないというふうにすごく思いました。現実の数としては、令和3年度の4歳人口が1579人いるうちに、公立の幼稚園に行っている人数34人ですよ。4歳児のわずか2パーセントなので、コストとか経営という意味で言えば、存続が成り立たないと思うんですけども、先ほど事務局のお話もあったんですけども、市民のニーズとして幼児教育に対して多様な選択肢があって、いろんな幼稚園の個性や保育園の個性、いろんなものがあって、ここに預けたいって人の受け皿があるっていうことはすごく大事だと思うので、人数だけで割りきれない話もあるのかなっていうふうに思ったんですけども。今現状、私立や保育園に対して、保育期間も短くてバスもなくて、市内の地域的なエリアでいうと地理的に西側に偏っているという状況を考えると、公の役割を果たしきれてるかなっていうところを思ったりして、そこに対して何とかしなきゃいけないんだろうなって言う風にも思います。例えば、クラスの人数を増やすとか、これまでの強みを生かすとかっていうことを考えると、センター的機能というふうに、先ほどからおっしゃっていただいている中身について、議論をする中で残すってことにならないと。先に3園を2園、1園にしましたというところで、せっかくだからこういう機能も付けましょうということだと、順序が違うような気がしています。だからエールと近いとか、公立の小学校と近かってことを生かして、療育相談みたいなことを受けられたり、幼小一貫校のような8年、9年で子供を見ていく、特別なプログラムをっていうその特色、私立にもあるように、公立の幼稚園にはこう特色があるというふうに打ち出していることが、そういう意味では生き残っている術なのかなって

うふうに思いました。

【会長】

ありがとうございます。かなり具体を示してくださったかなと思います。幼小一貫の話であるとか、そのセンター的機能のその具体のところをお話しただけかなと思います。今の委員のご意見踏まえていかがでしょうか。

私も個人的にはその幼小一貫ができる数少ない自治体かなと思っているところがあるんです。冒頭その公立の小学校の空き教室がないというお話でしたけれども、今後どうなるかわからないということもありましたし、そのあたり、小学校の校舎は耐震が全部済んでいますよね。そういった、物が減って心配事も減ってくると思いますし。あるいは早い段階から、小学生と物理的にも心の面でも触れ合える可能性が高まるということで、在り方としての強み、公立幼稚園の強みとしても押す事は可能かなということで、具体的な案を出していただいたのかと思います。あとはエールとはまた違うところにある療育相談の機能として、専門の先生方に、保護者に寄り添っていただくような、そういった機能も非常に重要なんじゃないかなと。そういうご意見もいただけたかなと思います。委員どうですか？仮に学校の中に園児がいる姿を想像して。

【委員】

ワクワクしますね。

【会長】

ですよね。私もワクワクします。ちょっと怒鳴りたくなかった瞬間に園児がいたら、怒鳴るのをやめようかなみたいな。きっといい影響がたくさんあると思います。

【委員】

補助金申請みたいなそういう事業ありませんでしたっけ。2、3日前のオンライン会議でちらっと見たんですけど。就学前の園児と小学校をドッキングさせるために、国に事業申請をするとお金がでるといふ。

【会長】

教育特区でしょうかね。特別なカリキュラムを申請して、補助金をもらいながら新しいことをやってみるっていうのはありますよね。お金がないこともひとつの理由ではありますので、そういったところでね、いろんなところで整備するための予算立てとして、幼小連携特区として取ってくるというのも一つの手かなと思います。

【委員】

やっぱり、先生方の今までの積み上げてきたノウハウっていうのが、数が減っていく中で途切れてしまうことが非常に惜しいと思うんですよ。先生達が頑張って自己研鑽して勉強し続けていきますっておっしゃっていても、相手がいないことにはそれは、ならないものなので、子供がいないのに、お勉強していても、うまくいかないと思うんですね。幼稚園、保育園、小学校、中学校、高校、大学も一緒だと思うんですけど、その子のその一瞬は、その時だけだから、他の子でやり変えることはできないわけじゃないですか。その日、その場で会っているその子のその時間をどう育てるかっていうことだと思うので。先生達は、毎日すごいプレッシャーとデータ更新しながらやられていると思うんですよ。それを途切れさせてはいけない気がします。例えば、3か所のうち1か所を減らします。でもやっぱりニーズがあるので、もう一回別のところでやりますっていった時に、いきなりは再編できないと思うんですよね。保育園でも幼稚園でも公立でも私立でも同じことですが、後付けの理由じゃなくて、今あるメリットを継続していただきたいなど。でも、その経営的な面でいうと大変厳しいですけども、受け入れ対象、間口を広げるのも1つの手かなと。そういう意味で、さっき3歳児の固定通所の子はいるのに併設の子はいないというふうに思ったので、定員数ぴったりの人数が通っておられるので、ここに入れなかった子達はいるんじゃないかと思うんですけど。それを取りこぼさないでフォローしていくっていう考え方もありだと思います。そういう意味で、私立が3歳児保育をしているから3年保育に手を出すのではなくて、こぼさないためにという前向きな理由で。

【会長】

機能強化という意味で、3歳児を受け入れるということですね。

【委員】

そうです。2割支援が必要な子がいるって言われていて、確かに小学校見ても、年々多くなっていると思っていて、今までは学年4クラスあったら、一人加配の人がいるかなという感じだったんですけど、息子が卒業した次の年が、1クラスに3人廊下で勉強している子がいるんですよ。色々理由があって、でも先生の目が届くところにいて、教室がざわつくのが嫌だっていう子がいて、廊下でおとなしく、ちゃんドリルをやれる子たちなので、加配の先生は廊下で、1年生2年生通して、廊下の見守りの先生が1人いますみたいな感じで。でもちゃんと自分で出来る子はそっと見守っておけばいいので。こんな対応していて、人数が増えてきているなっていうのは、私も実感で待っています。

【会長】

機能強化という面で、下の年代のお子さん達から入れていくと。教育委員会の方がそういう方向でよければ、幼稚園は3歳児から受け入れるというのは可能ですか。

【委員】

やりたいです。やらせていただきたいです。

【会長】

なるほど、積極的なご意見ですね。20名という利用者実数があったわけですが、3歳児を受け入れたところで、どのくらい増えるかというところを試算しないことには、おそらく量的なところには至らないところもあるかなと思います。いわゆる資本主義的な経営論的な話も踏まえて、どのくらいの着地で、適正配置を持っていくかということです。そのあたりを最後考えていかなければならない。子どもの数の減少、運営のコスト、機能強化、そのあたりのいい落とし所、着地点の方向性。ここで決まった数字がそのままではなないと思うんですが、ある程度の方向性については少し議論していく必要があるかなと思います。

事務局にお尋ねします。ここで決まった方向性は、令和何年度から実施されていくものになりますか。

【事務局】

答申を頂いて、それを基に教育委員会で方針を決めていきます。もっと具体的にいくには計画を作るという段階を踏んでいくので、そこには一定の時間はかかります。

【会長】

来年度すぐという形ではないですか。例えば、今3園を1つ減らすべきという話になった時に、2つの園にしていく時程は、令和何年ぐらいからでしょうか。

【事務局】

入園の申し込みのタイミングもありますので、申し込む際に自分の園がどうなるっていうところもわかった上での申し込みをして頂くという形になると、もし園を閉じるとなると最短だと令和6年度でしょうか。

【事務局】

補足します。前回の閉園の事例と比較検討しますと、今申し上げた通りです。当然ながら、これから入ってくる方、今いる方、そこに関わる方々へも説明が必要でございますので、会長が今言われたように今回の検討委員会の決め事が直ちに来年度の入園から影響があるということはずありません。1つずつ、募集も含めて丁寧に説明していくというのがスタンスです。

ただ、実際に幼児人口の減少のお話も出ましたけれども、あくまで仮定の話となりますが、園の閉園の方向性が出たとしたならば、前回の事例に習いますと、直近では3年とかそう

いう先々の中で、先程申し上げたような基本方針や統合計画などに基づいて決定していくということになるかと思えます。

【会長】

なるほど。例えば、具体的な数字を出したとして、その間にその幼稚園の機能強化や在り方が進んでいき、公立幼稚園の入園の割合が増えてきたとなった場合については、改めて適正配置の園の数が訂正されることがあるのかどうか。いかがでしょう？

【事務局】

仮定の話でございますので、なかなかお答えが難しいところですが、現時点では幼児人口減少傾向の中で、入園希望者が減ってきたという状況に対して、ご検討いただいている現状でございまして、仮に幼児人口が増加した場合にあっては違う方向のものが出てくると思うんで、そこについては、答申の中で、そうした状況を表現した形にさせていただくということになるのではないかと思います。答申後、方向性が違った意味合いのものになってくるので、機能強化ということと、園児が減ってきているから量の議論というところは。

もしそういうことを入れるとすれば、そうした状況を想定した形で答申をいただき、基本方針が描かれるということになりますので。その場面になって、もう一回検討委員会というのはなかなか難しいので、一体として考えていただいたほうが良いと思います。

【会長】

なるほど。方向性として、理念が先にあるべきだと思います。その大前提は第3次基本構想でいいのかなと思います。「すべての“いのち”がよろこびあふれる未来をつくっていく」ために、日野の学校がどうあるべきか。そこをベースとして、公立幼稚園の在り方について検討していくと。具体的に出ているのは、幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿を具現化するために、幼保小連携を踏まえたセンター的な機能というところが、まず1つかなと思います。もう1つは、補完的な役割をブラッシュアップ、アップデートした形で言いますと、「インクルーシブ」というのが園としての在り方の大前提という形になるかなと思います。その辺りを謳っていく中で、それでもなお入園者数が増えないのであれば、園の数を減らすことも辞さないといった、そういう書き方は許されるのかという話になるかと思えます。

私は園の数については後だと思うんです。理念がまず前提にあって、その後に園を減らすのかどうか。前提としては減らす前提だと私も思います。経営論で言えば、明らかに投資とリターンが合っていない可能性があると思われれます。でもそのことをもっと幼稚園が積極的に説明をして、教育委員会がバックアップして説明をして、さらに今後の在り方として、例えば幼小一貫を目指してみたいな言葉を踏まえて記載をした中で、「そういう園なら入れてみたいな」と思う親が増えた場合に、ある程度維持をするように書けるのか。

【事務局】

会長からもお話いただきましたように、今回の検討委員会は市立幼稚園の適正配置ということで議論をいただいております。その中で、今日のプロセスとして、量の分野と質の分野とそれぞれ御議論いただいて発言もたくさんいただきました。その中で、今後の幼児教育の在り方について、かなり幅広い分野で取り扱うものですから、先ほど委員の方からも事務局の方からも話がありました通り、別途会議体等を開いた中で、詰めるべきところは詰めていくというのは必要だという認識を持っています。ただ一方で、今後答申を作るにあたって、前回は具体的な募集人数の少なさから、第五幼稚園ということで具体名まで上げていただいたところでもありますけれども、先程の機能強化ということもありましたけれども、人数が増えていくからというだけではなく、特別支援や幼保小連携の話も今日色濃くご発言いただきました。そういったところも1つの機能強化の部分かなと認識しております。私どもが基本方針や、統廃合計画というものを、今後を作るような答申にあたった場合は、事務局の中だけで、今後の幼稚園の在り方を教育委員会として選ぶことできませんので、具体としてはそういったところの要件を答申の方にしっかりと書いていただき、具体が分かる表記というのが1番望ましい在り方だと思っております。

【会長】

機能強化の具体だけではなく、数字に関する所、どこの園をみたいなところまで、突き詰めてもらいたいということですね。そうであると、ある程度方向性を絞ってまとめていく必要があるかということですね。機能強化、幼保小連携、インクルーシブという視点あたりが1つのポイントになっておりますけれども、以前の資料7番をお持ちでしょうか。園の配置のカラーのものです。子供達がかかり減ってきている中で、全体のバランスを考える、幼保小連携のしやすさ、インクルーシブの視点あたりを踏まえて、どのように園の再編、適正配置を考えていくかという議論を残り少ししていきたいと思っております。子供達の安全安心が、教育の大前提となるわけなんですけれども、耐震診断が現時点で済んでいないところはどこでしたっけ。

【委員】

第四幼稚園です。

【委員】

だけど地理的には四幼は中核となりそうなんですよね。

【会長】

そうですか。4小には余りの教室はないですか。4小の児童数の減少率というのはどうで

すか。

【事務局】

冒頭申し上げたとおり、今 35 人学級ですとか、空き教室は多用途に使われてる実態がございます。そんな中で、地区内人口において、一時的に急増している年度とか、その他は横ばいで平行移動しているような状況ですので、先程ご覧頂いた当初は配布の資料から、1 クラスから 2 クラスほど、近い年度で学級数が今後増える見込みがございますので、現時点では、向こう 5 年間程度は、第 4 小学校の教室を活用することは実質困難かなと思っています。

【会長】

隣接していて、連携が非常にやりやすい面があり、位置的にもエールから離れたところにあるというのは、メリットになるのかなと思うんですけど。第二幼稚園のメリットは、平小と隣り合っている、道を挟んでということですよ。幼小連携としては非常にやりやすい。七幼のメリットは。

【事務局】

公立の保育園と隣接しているということと、エールが同じ街区の中にあるので、そこでの連携がしやすいということがございます。

【会長】

今後、こども園みたいなものを市の方で検討されているかどうか。それによって、隣り合っている幼保の関係が変わってくるかなと思うんですね。隣り合っているんだけど、全く別物っていう存在であるならば、隣り合っている価値は、そんなに高くなくて。また、公立の幼稚園の先生方がノウハウとして、多様なお子さん達に対応する術をお持ちというのは、これまでもたくさんご意見が出てきていますので、エールとの連携よりも、むしろということあるのかもしれないですね。

【事務局】

現時点においても幼稚園という形で連携はしています。お互いの先生や園児の交流はしてきています。

【会長】

なるほど。おそらく保護者のニーズとしては、隣同士の連携というよりも、預かりの部分かなというふうに思われます。これまでも保護者委員皆様のご意見の中で、何時まで預けたいという意見だったり、あるいは 3 年保育が可能かどうかだったり。そのあたりが、論点に

なりやすいのかなと思うんですが、それは機能強化として、こういうことが望ましいと謳えば、今後検討をいただけるのかどうか。

【事務局】

そこについては、あの諮問という形で答申のご検討お願いしているので、そこでいただいたものについて、教育委員会で検討という形になるかと思います。

【会長】

なるほど。委員の皆様いかがでしょうか。1つの在り方ですね。七幼は小学校が遠いので、幼保小の立地的な連携というのは難しいんだけど、幼保の連携、こども園的な再編成アップデートというのはしやすい園ではあるのかなと思います。委員の皆様のご意見をおっしゃっていただければと思います。幼保の連携、一体化はどう思われますか。

【委員】

第七幼稚園とあさひがおか保育園のカリキュラムは、お互いに合わせながら進めてはいます。ただそこをもう一步踏み込んで、認定こども園とかそういう話になると、私達レベルではない。保育園と幼稚園だけではなくて、教育委員会とこども部の方で、お考え頂いて、実際に話し合っていないと。正直、幼稚園と保育園だけでは難しいところです。

【会長】

文科省の管轄と厚労省の管轄で、大元が違うので、その辺りが縦割りの部分の壁が難しいのかなというご意見かと思います。諮問に対して答申を出したとしても、教育委員会内だけでは判断しきれない内容になるとかと思います。保護者の立場としてどうですか、認定こども園は。

【委員】

どうなんでしょうか、正直わからないというのが本音です。

【会長】

小学校の先生、認定こども園から入学してきた子供はいますか。

【委員】

私は旭が丘小学校にいて第七幼稚園、あさひがおか保育園と幼保小連携、交流はしていました。来てもらう時には、保育園のお子さんと幼稚園のお子さんに一緒に来てもらったり、子供達が行った時には、幼稚園保育園の子供達の5歳児が一緒に対応してくれたり。小学校入学にあたってということで、連携の担当ということもあって、第七幼稚園に呼ばれて話

をする時には、幼稚園の保護者と、保育園の保護者が一緒にホールで話を聞いてくれました。最初の頃は幼稚園から入学した子と、保育園から入学した子の違いや差について、保護者の方は気にされていたんですけども、すでに内容は同じで、多様な所からたくさんの子が来ているから、自信を持って違いを語り合うことで発信、交信、受信ができるから、違いがあることで活動が活発になるというお話をさせていただくと、すごく安心されています。ですから、こども園であろうが保育園だろうが幼稚園であろうが私立が公立だろうが、多様なお子さんが来ることによって、小学校の活動が活発になるという意識を低学年の先生が持ってくれるように、色々な研修をさせていただいているので、どこから来ても、私達はこっちが良いって事はないです。

【会長】

第七幼稚園は保育園と隣接しているところと、裏にエールがあるというところがメリットになりそうだということでしょうか。第二幼稚園は平山小と隣接していて、幼少の連携が図りやすいということですね。近くに公立の保育園はありますか。

【事務局】

平山地域という少し広いエリアになりますけれども、駅前に民間の栄光保育園などがございます。

【会長】

公立はないということですね。第二幼稚園については幼少の連携が図りやすいということですね。距離的には第四幼稚園がエールと対極にあり立地はいいが、老朽化が進み耐震診断が未実施ということでしょうか。四小とはフェンスを挟んで隣という好条件もあるということですが。ちなみに幼稚園を建て替えるのに金額的にはどれくらいかかるのでしょうか。

【事務局】

建物の構造自体は、一般的には RC という鉄筋コンクリートを使った構造となります。なので、建物の構造や 1 階、2 階建てで大きな差が出るんですけども、公有財産建物台帳などを参照しますと、七幼や二幼のようにホールがあり 2 階建という構造だと、その当時の取得価額の参考値としては 2 億前後はかかっているという記録が残っています。

【会長】

これまで見てきた数字の通りですね。年間数十人、あるいは十人前後に対してその額が適正かどうかというところも議論しなきゃいけないのかなと。以上を踏まえて、適正の数の部分、どこの園までは今日はいいいのかなと思うんですが。

【委員】

実際に動き出すのが、何年か先ということであれば、幼小一貫校というのも考え方としてあるのかなと思います。四幼が建て替えなければいけないのであれば、小学校でも老朽化しているところがあるので、セットで考えて新たな建物を建てることも、長いスパンで考えるならば手なのかなとは思いますが。財政の話もありますので、軽々とは言えませんが、一意見として。また、小学校と幼稚園が連携しながらやっていくこと、幼稚園小学校関係なく楽しく学んでいく姿は見てみたいとは思いますが。

【会長】

建設的なご意見をありがとうございます。中長期的な視点として、小学校で耐震が済んでいないところはないと思うんですが、建て替えが必要な学校はありますか。何年後とか。

【事務局】

まだ直近で何年やどこの学校かはだと言い切れないところがございます。全体的に老朽化しているのは事実です。どこかのタイミングで建て替えなのか、骨格は活かして大規模に改造するのか、10年後ぐらいからが1つの目安になってくるのかなと思っています。その前段で、特に古い学校について具体的な議論をしていく時期になると思います。一方、当時幼稚園が2億円と考えると、小学校は規模で比べると、そこでかかるお金は相当なものになると思います。建て替えるタイミングはまだ先になるんですけども、そこを目指して今みたいな小中だけでなく幼小中のようなイメージを持っておくということは十分考えられますし、それは1つの案として教育委員会として考えていきたいことです。具体的な時期とか、数字は申し上げられないのですが、少し先のイメージです。

【会長】

ありがとうございます。こういった内容を書き込んでもかまわないわけですね。

【事務局】

そうですね、例えば在り方とか方向性とかの中に、当面は子供の数が減ってしまいますので、現実論ということがあるんですけど、今後のやり方の一つに、一貫的な教育をしていこうとか、いくつかのおっしゃっていただいたようなこと、例えばセンター機能についてなど。センター機能は、たぶん単なる研究機能ではなくて、実践を行いながらだから、私立幼稚園や保育園と連携していくとか、インクルーシブも公立だけでやることではないと思うんですけども、センター的機能があって、それを広くいろんなところでやっていってもらおうとか。連携のお話もありましたけれども、幼児教育の特性が、小学校にも活かせると思いますし、そういうことを特徴として、これからの在り方、大切にしていこうこと等を書いて頂

くイメージを持っています。在り方として考えるべきこと、考えてほしいことはどんどん積極的に出していただいて、量の議論っていうのはあるんですけども、役割として持つべきこと、大切にすること、日野市全体としてこういう風に進めてくということを書くのかなというイメージを持っております。

【会長】

ありがとうございます。先程出てきた複式学級、2年齢での学びについては、日野市と連携している風越学園が「イエナプラン教育」という教育方法を取り入れております。2年齢は当然で、色んな人達がごちゃ混ぜになって、それぞれの良さを生かし合うということ。まさにそういうものを中長期的なビジョンとして、建物、理念を含めてみんなで一緒にやっついこうとやっています。そういうこと考えると、公立幼稚園は程度規模が小さくなるかもしれませんが、確実に残していく必要があると言う前提で、今日のところは終わりにできればと思います。具体の数字であるとか、どの辺にというところまでは今日は至らなかったんですけども、そのことについてまた次回という形で、今回は答申の骨格の部分について事務局にまとめて頂いて、それについて検討できたらいいかなと思います。ゴールが決まっておりますので、メール等での皆さんに情報を流しながら、それを前提に話を進めることもあるかと思っておりますので、よろしく申し上げます。最後に事務局から連絡があればお願いします。

【事務局】

次回の日程でございます。10月12日火曜日、18時30分からを予定しています。場所は市役所5階の504会議室となります。開催日近くになりましたら、改めて通知文をお送りいたしますので、日時場所だと改めてご確認いただきたいと思っております。また、本日3回目までの資料につきましてはお手数ですが、次回もまたお持ち頂くようお願い致します。以上でございます。

【会長】

委員各位から最後言い残したことはありますか。以上をもちまして会議を終了します。お疲れ様でした。